

場所を表す表現 + 知覚動詞 + 知覚の対象という形式を 有する構文について

— 機能論的な観点からの考察 —

海 寶 康 臣

1. はじめに

英語には、(1) のように、主語が場所を表す表現で、述部が知覚動詞であり、その後に知覚の対象を表す要素が生起する構文がある。

- (1) The Red Square has seen the crowning of Russian Tsars as well as the execution of those who angered [them].¹⁾

(http://www.discovermoscow.com/attraction_details.asp?attractionid=37)

(2a) (2b) の不適格性が示すように、この構文の述部に生起可能な動詞には制限がある。

- (2) a. *The Red Square has looked at the crowning of Russian Tsars as well as the execution of those who angered them.
b. *The Red Square has watched the crowning of Russian Tsars as well as the execution of those who angered them.

また、(3a) と (3b) の適格性の違いから明らかのように、知覚の対象である目的語として生起可能な要素にも制限がある。

- (3) a. Alabama saw a race riot.
b. *Alabama saw the moon.

本稿の目的は、久野 (1978)、Kuno (1972, 1987) で提唱され、高見 (1995)、久野・高見 (2006) 等で利用されている理論である機能的構文論の観点から、場所 + 知覚動詞 + 知覚の対象という形式を有する構文 (以下、場所 + 知覚動詞構文と呼ぶ) について考察し、この構文は、(4) のような時 + 知覚動詞 + 知覚の対象という形式を有する構文 (以下、時 + 知覚動詞構文と呼ぶ) と同じ制約を受け、同じ機能を有することを明らかにすることである。

- (4) The 18th century saw the American Revolution.

(『ジーニアス英和辞典』第4版)

なお機能的構文論は、言語事実を、新情報／旧情報、文脈や談話等の言語使用に係る概念に基づいて説明する文法理論である（高見 1995: 10-11）。

2. 事実観察

2.1. 目的語の特性

場所 + 知覚動詞構文は、(1) や (5) の下線部のように、目的語が event である場合が多い。(1) の目的語は「帝政ロシア皇帝の戴冠式」であり、(5) の下線部の目的語は「ホテル開発」という event である。

- (5) . . . The railroad line first called the Chautauqua Lake Railroad, from Jamestown to Mayville, was in place along the east side of the lake by 1888. Connections along the west side of the lake were slower to develop. Chautauqua Traction, a trolley line built by the Jamestown Street Railway Company, did not reach Mayville until 1904. Consequently, that part of the lake saw less hotel development. . . .²⁾

(http://www.townofbusti.com/lake_hotels.html)

たしかに場所 + 知覚動詞構文では、目的語が event である場合が多く、Onoe and Suzuki (2002) も同構文の目的語は event に限られると考えている。しかしながら、同構文には (6) (7) の下線部のように目的語が event でない例も存在する。

- (6) The river saw the face of young George Washington, in 1754, when he led his small army of Virginian militia through the area in the hopes of constructing a fort at present day Pittsburgh, . . .

(<http://www.fay-west.com/youghtrail/information/history.php>)

- (7) Although the palace saw many successful years and millions of visitors financial problems plagued the Palace. Its sheer size meant it was impossible to maintain financially and it was declared bankrupt in 1911.

(http://www.bbc.co.uk/london/content/articles/2004/07/27/history_feature.shtml)

(6) の下線部の目的語の「若き日のジョージワシントンの顔」や (7) の目的語の「長年の繁栄した時代と何百万人もの訪問者」は、何れも event とはいえない。場所 + 知覚動詞構文の目的語は event である場合が多いが、必ず event でなければならないというわけではない。この点は、時 + 知覚動詞構文に関する事実観察の結果と同じである。

2.2. 述部に生起可能な動詞

海寶 (2008) では、(8) (9) に示すように、時 + 知覚動詞構文の述部には、視覚以外の知覚を表

す動詞も生起可能であることを指摘したが、場所+知覚動詞構文の述部の場合はどうであろうか。

- (8) The twentieth century heard millions of voices calling for peace all over the world.
- (9) The 18th century felt the American Revolution.

(10a) (10b) が示す通り、視覚以外の知覚を表す動詞は、場所+知覚動詞構文の述部にも生起可能である。

- (10) a. The remainder of OU's team just entered the field through a tunnel under the Miami student section. The stadium heard the first peals of Boomer Sooner as the OU band came alive.³⁾
(http://www.soonersports.com/ViewArticle.dbml?&DB_OEM_ID=31000&ATCLID=208401371)
- b. The remainder of OU's team just entered the field through a tunnel under the Miami student section. The stadium felt the first peals of Boomer Sooner as the OU band came alive.

しかしながら、場所+知覚動詞構文の述部の知覚動詞は、他の知覚動詞と自由に交換可能というわけではない。

- (11) a. Our town has felt many changes.
- b. *Our town has heard many changes.

(11b) が不適格な理由については、§ 3.2 において説明する。

3. 場所+知覚動詞構文に対する機能論的制約

3.1. 提案

本稿では、場所+知覚動詞構文に対して (12) の制約を提案する。なお情報の重要度に関しては (13) の規定に従う。

- (12) 場所+知覚動詞構文は、知覚の対象を表す要素が文中の他の要素より情報の重要度が高いと解釈される場合にのみ、適格となる。
- (13) 話し手がある文を発話する際、聞き手がその文中のある要素の出現を予測できない (unpredictable) と話し手が見なす時、その要素は文の焦点であり、重要度が高い情報である。言い換えれば、話し手が聞き手に特に伝達したい部分、つまり断定 (assert) している部分を焦点、または重要度が高い情報と呼ぶ。 (高見 1995: 136)

(13)の規定に従うと、例えば、文脈上新情報である重大な出来事や、様態を示す副詞などは重要度が高い情報を表しているとみなされる。これに対して、主題として機能しやすい要素や「存在」や「出現」の意味を表す動詞などは重要度が低い情報を表しているとみなされる。

場所+知覚動詞構文において、知覚の対象を表す要素が重要度の高い情報を表さなければならないのは、知覚の対象を表す要素によって、場所を表す要素についての特徴づけがなされなければならないためと考える。このように考えるのは、知覚の対象を表す部分の情報量が十分多くないと、この特徴づけに支障が出るからである。§2において、場所+知覚動詞構文は目的語が event である場合が多いと述べたが、これは、目的語が event の場合の方が、重要度の高い情報として解釈されやすく、主語の特徴づけをしやすいためと考えられる。§2では(6)(7)を提示して、場所+知覚動詞構文の目的語が必ず event でなければならないわけではないことを述べた。(6)(7)は目的語に event でない要素が生起しているにもかかわらず適格とみなされる。これは、目的語が、主語である場所を表す要素の特徴づけを行うのに、十分な情報量を有するためと考えられる。また、場所+知覚動詞構文において、述部の情報量が多いと不適格になるのは、この特徴づけという機能を阻害するためと考えられる。この構文における see や hear などは、単に主語と主語の属性や特徴を表す知覚の対象とをつなぐ copula のような役割を果たしているものと思われる。

3.2. 述部の情報量と適格性

本節では、述部の表す情報の重要度が場所+知覚動詞構文の適格性を左右することを示す。

- (14) The Red Square has { seen /*looked at /* watched} the crowning of Russian Tsars as well as the execution of those who angered them.

(14)が示すように、場所+知覚動詞構文の述部には、seeが生起することはできるが、look at や watch は生起することができない。述部に see が生起可能なのは、知覚の対象を表す the crowning of Russian Tsars が文中の他の要素より情報の重要度が高いと解釈されるためである。主語の The Red Square は主題として機能しやすい場所を表す表現なので、重要度が低い情報を表しているとみなされる。また、see は come into one's eyes と定義されることが示唆するように、広義の出現の意味を表す⁴⁾。出現を表す動詞は情報の重要度が高くないので、see は重要度の低い情報を表すとみなされる。なお出現を表す動詞は情報の重要度が高くないということは、(15)に示すように、高見(1995)によって指摘されている。

- (15) [存在や出現を表わす動詞および運動を表わす動詞]は、通例、文中で意外な情報を伝達するわけではなく、話し手が特に伝達したい部分[ではない。]これらの動詞は文中の他の要素に比べ、情報の重要度が高くない。(高見 1995: 197)

主語や述部とは違い、知覚の対象を表す目的語の the crowning of Russian Tsars が重要度の高い情報を表しているとみなされるのは、「帝政ロシア皇帝の戴冠式」が大きな出来事だからである。もちろん、the execution of those who angered them も大きな出来事ではあるが、as well as に後続しているため、話し手が聞き手に優先的に伝達したいと考えている情報とはいえない。話し手が聞き

手に優先的に伝達したいのは、as well as に先行する the crowning of Russian Tsars の方なので、この箇所の方が重要度の高い情報とみなされる。

(14) が示すように、動詞が look at の場合に不適格なのは、the crowning of Russian Tsars が文中の他の要素より情報の重要度が高いということが保障されないためと考えられる。これは、look at が see とは違い、the crowning of Russian Tsars と同様に重要度が高い情報を表すためと考えられる。look at と see の意味の違いは、(16) に示す通りである。

- (16) see は注意を払っていても、いなくても目に映ることを述べる動詞である。何があるかを見ようとして注意を集中させたり、払ったりする行為を表すには look at を用いる。

(小西編 2006: 959)

場所+知覚動詞構文の述部に look at が生起できないのは、look at が carefully という様態の副詞の意味を含んでいるためである。そのために look at は、知覚の対象を表す表現と同様に、重要度が高い情報を表すとみなされる。watch が不適格なものも、look at が不適格なのと同じ理由による。小西編 (2006: 960) は watch を「<動くまたは変化するものを>注意深く見る」と定義している。この定義から明らかのように、watch もその意味の中に carefully を含んでいる。そのため、重要度が高い情報を表すとみなされる。

(17) に示した hear と listen to の場所+知覚動詞構文の述部への生起可能性の違いも、see と look at、watch の生起可能性の違いと同じように説明することができる。

- (17) The stadium {heard /*listened to} the first peals of Boomer Sooner as the OU band came alive.

hear は come into one's ears と定義されることから分かるように、see 同様広義の出現の意味を表すので、重要度の低い情報を担うとみなされる⁵⁾。一方 listen to は、(18) が示すように、その意味の中に carefully を含んでいる。そのため、重要度が高い情報を担うとみなされる。

- (18) Hear は聞く気持ちがあるなしに関係なく音が聞こえる状態をいう。Listen は、音や人の話に注意して耳を傾けることを意味する。

(小西編 2006: 574)

このように、時+知覚動詞構文では、述部の表す情報の重要度が高いと不適格になる。(19) が不適格なものも、述部の表す情報の重要度が高いためと考えられる。

- (19) *The Red Square has carefully seen the crowning of Russian Tsars as well as the execution of those who angered them.

(19) では、carefully という様態を示す副詞が述部の情報量を高くしている。

(20a-c) の (不) 適格性も述部の表す情報の重要度の違いによって説明可能である。

- (20) a. Our town has seen many changes.
 b. Our town has felt many changes.
 c. *Our town has heard many changes.

高見 (1995: 154) は、「先行文脈がなく、社会常識から判断して以外で予期しない行為や状態を表す要素」は重要度が高い情報であるという見解を提示している。(20a-c) の適格性の違いは、動詞によって述べられている行為が意外で、予期しないものであるか否かの違いによると考えられる。変化を目の当たりにしたり、変化を感じたりすることは日常生活において一般的な事柄であるため、(20a) (20b) の述部の see や feel は文内で相対的に重要度が低い情報を表すとみなされる。これに対して、「変化を耳にする」という表現は、特殊な文脈がない限り容認されにくいと思われる。これは、「変化を耳にする」するという状況が日常生活において一般的ではないことによる。(20c) が不適格なのは、「変化を耳にする」という状況が一般的ではなく、意外で予期しにくいことによると考えられる。

3.3. 知覚の対象を表す要素と適格性

本節では、知覚の対象を表す要素の情報の重要度が、場所+知覚動詞構文の適格性を左右することを示す。

- (21) a. Alabama saw a race riot.
 b. *Alabama saw the moon.

(21) は目的語が a race riot か the moon かで適格性が異なることを示している。この適格性の違いは、知覚の対象を表す要素が重要度の高い情報を表していると判断可能か否かの違いによる。「人種暴動」は重大な出来事なので、Alabama を特徴づけるのに十分な情報量があり、重要度が高い情報を表しているといえる。他方「月」は日常生活で頻繁に見られ意外ではない存在物なので、Alabama を特徴付けるには情報量が少なすぎるとみなされる。そのため、a race riot が目的語として生起している (21a) とは違い、the moon が目的語として生起している (21b) は、(12) の制約に違反し、不適格とみなされる。

(22) と (23) の適格性の違いも (12) の制約に基づいて説明可能である。

- (22) Historically, the peninsula had considerable military significance, dominating the Irbe Strait and the sea route to Riga. In the first half of the 20th century strong coastal batteries were installed on it by Imperial Russia up to 1917 and then by the Soviet Union after 1940. In the course of World War II, the peninsula saw major fighting between Soviet and German forces, first in 1941 with the Germans attacking and the Soviets defending, and again in 1944 with the roles reversed.

(<http://www.touristlink.com/estonia/sorve-peninsula/overview.html>)

- (23) In the course of World War II, major fighting between Soviet and German forces broke out. *The peninsula saw {it / the fighting}.

(22) のような位置に、場所+知覚動詞構文が生起している場合は、知覚の対象を表す要素が文中で他の要素よりも重要度が高い情報を表しているという解釈を妨げる要因がないので、(12) の制約には違反しない。これに対して、(23) の下線部では、目的語の *it* もしくは *the fighting* は、直前の文中に *major fighting between Soviet and German forces* という形式で生起しているので、重要度が低い情報を表しているとみなされる。そのため、知覚の対象を表す要素が文中の他の要素よりも重要度が高い情報を表しているということが保障されないので、(12) の制約に違反するとみなされる。

3.4. 文頭の場所を表す要素

本稿では、場所+知覚動詞構文の文頭の場所を表す表現は重要度が低い情報を表すとみなしているが、本節ではこの見解の妥当性を示したい。高見 (1995:37) は (24) のような主張をしている。

(24) 文頭の要素は、一般に、その文の主題 (*theme / topic*) を示し、情報構造上、旧情報または重要度が低い情報を表わす。[(25)] の適格性は、時 (や場所) を示す副詞句は主題として機能することができ、旧情報、重要度が低い情報を表わし得ることを示している。
(高見 1995: 137)

(25) *Yesterday, I went to Shinjuku.*

(26) *In the country that most people speak the same language, it is really a rare trial in the world to newly adopt another official language.*

(『ジーニアス英和辞典』第4版)

(25) の *yesterday* や (26) の *in the country that most people speak the same language* が文頭に生起可能であるという事実は、これらの要素が主題であって、重要度が低い情報を表していることの一つの証拠を提供しているといえる。

高見 (1995) は (25) を日本語にすると、「昨日は、新宿に行った」というように、主題の「は」が現れることを指摘しているが、この場合と同様に、(26) を日本語にした場合も、「大多数が同じ言語を話す国においては」のように、主題の「は」が現れる。この点も場所を表す表現が主題として機能し、重要度が低い情報を表す証拠といえる。

場所+知覚動詞構文の文頭の時を表す表現が *topic* として解釈されなければならないことは、(27B₁) が不適格あるいは適格性が低いという事実からも裏づけることができる。

(27) A: *Where did the fighting between Soviet and German forces break out?*

B₁: *The Sörve Peninsula saw {*it /??the fighting }.*

このように、文頭の場所を表す表現が焦点になるような文脈では、この構文は使用することができない。

本稿での *topic* の定義は、Lambrecht (1994) に従っている。Lambrecht (1994: 131) は *topic* を (28) のように規定している。

- (28) TOPIC: A referent is interpreted as the topic of a proposition if in a given situation the proposition is construed as being about this referent, i.e. as expressing information which is relevant to and which increases the addressee's knowledge of this referent.
- (29) Writing in the first century BC, the ancient geographer Strabo described Petra as "having springs in abundance, both for domestic purposes and for watering gardens." Indeed, the Nabataeans chose this location not only for its fortress of rock cliffs, but also for its available water supply: this part of the desert saw a mere 6 inches (15 centimeters) of rain per year. Petra's local springs flowed enough for some families to fetch water daily, but these streams alone could not support a population of around 20,000 in and around the city.
(<http://www.amnh.org/exhibitions/past-exhibitions/petra/city-of-stone/water-in-the-desert>)

下線部の場所 + 知覚動詞構文は、主語の *this part of the desert*、つまり古代エドム人の都市であるペトラに関連しており、この要素についての聞き手の知識を増やす情報を表している。したがって、*this part of the desert* は topic であるといえる。このように、場所 + 知覚動詞構文の文頭要素は topic なので、重要度の低い情報を表しているとみなされる。

4. 場所 + 知覚動詞構文の機能

Lambrecht (1994: 117-150) は、文が果たす機能として (30a) - (30d) を挙げている。海寶 (2008) は時 + 知覚動詞構文が (30a) の機能を果たすことを示したが、本稿では、場所 + 知覚動詞構文もこの機能を果たすと主張する。

- (30) a. To convey information about given discourse entities
b. To identify arguments in open propositions
c. To introduce new entities into the discourse
d. To report events out of the blue

(30a) は特定の談話存在物に関する情報を伝える機能であり、Lambrecht はこの機能を果たす文のことを *topic-comment sentence* と呼んでいる。場所 + 知覚動詞構文がこの機能を果たすと主張するのは、前節でみたように、同構文の文頭要素が *topic* だからである。(30b) は、開放命題、つまり変項を含む命題の変項の値を指定する機能であり、Lambrecht はこの機能を果たす文のことを *identificational sentence* と呼んでいる。また、(30c) は談話内に新たな存在物を導入する機能であり、この機能を果たす文のことを *presentational sentence* と呼んでいる。最後に、(30d) は出し抜けて出来事を報告する機能であり、この機能を果たす文のことを *event-reporting sentence* と呼んでいる。

場所+知覚動詞構文が *identificational sentence* でないことは、(27B₁) の不適格性あるいは適格性の低さが示している。また、*presentational sentence* や *event-reporting sentence* でないことは、この構文の文頭要素が *topic* であることから明らかである。(31) の Lambrecht (1994:177) からの引用が示すように、提示文の基本的な伝達機能は文内の項の特性について叙述を行うことではないので、場所+知覚動詞構文が *presentational sentence* であるならば、文頭要素は *topic* でないはずである。

- (31) The basic communicative function of [presentational sentences] is not to predicate a property of an argument but to introduce a referent into a discourse, often (but not always) with the purpose of making it available for predication in subsequent discourse. (Lambrecht 1994: 177)

5. おわりに

本稿では、場所+知覚動詞構文には、知覚の対象を表す要素が文中の他の要素より情報の重要度が高いと解釈される場合にのみ、適格となる、という制約が課されることを明らかにした。場所+知覚動詞構文にこの制約が課されるのは、この構文では、知覚の対象を表す要素によって、文頭の場所を表す要素についての特徴づけがなされなければならないためという見解を提示した。また、場所+知覚動詞構文は、*topic-comment sentence* であることを明らかにした。本稿での考察により、場所+知覚動詞構文は、時+知覚動詞構文と同じ制約を受け、同じ機能を有することが明らかになった。

注

- 1) 本例および出典が明記されていない用例の適格性の判断は、カナダ出身の英語母語話者によるものである。本例の [them] の箇所は出典では the Tsars であるが、them の方がより自然に感じられるという同英語母語話者の判断に依拠して [them] としている。
- 2) 本稿において用例に引かれている下線は筆者によるものである。
- 3) (10a) (11b) の用例中の OU は the University of Oklahoma を指し、Boomer Sooner は the University of Oklahoma の応援歌 (fighting song) である。
- 4) この see の定義は柏野 (1993: 99) によるものである。
- 5) この hear の定義は柏野 (1993: 99) によるものである。

参考文献

- 海寶康臣 (2008) 「時を表す表現+知覚動詞+知覚の対象という形式を有する構文について—機能論的な観点からの考察—」 *JELS* 25, 101-110, 日本英語学会.
- 柏野健次 (1993) 『意味論から見た語法』 研究社出版, 東京.
- Kuno, Susumu (1972) "Functional Sentence Perspective: A Case Study from Japanese and English," *English Inquiry* 3, 269-320.
- Kuno, Susumu (1987) *Functional Syntax: Anaphora, Discourse and Empathy*, The University of Chicago Press, Chicago.
- 久野暉 (1978) 『談話の文法』 大修館書店, 東京.

久野暲・高見健一（2006）『英語の構文とその意味—生成文法と機能的構文論』開拓社，東京．

小西友七（編）（2006）『現代英語語法辞典』三省堂，東京．

Lambrech, Knud（1994）*Information Structure and Sentence Form*. Cambridge University Press, Cambridge.

Onoe, Toshiki and Takeru Suzuki（2002）“Semantically Light *See*,” *JELS* 19, 31-40, 日本英語学会．

高見健一（1995）『機能的構文論による日英語比較—受身文、後置文の分析—』くろしお出版，東京．

（本学言語教育センター嘱託講師）